

青森市の埋蔵文化財

三内丸山 遺跡発掘調査報告書

1 9 8 8

青森市教育委員会

序 文

三内遺跡は、寛政8年（1796年）菅江真澄が「栖家の山」で、寒苗という処で土器が出土するということが記録されており、木造町の亀ヶ岡遺跡と共に、青森市にとっては記念すべき地名であります。

また、青森市において最も多く発掘調査されている地域で、慶応大学、県教委、市教委と過去に8回も調査されております。

今回は、宅地開発に伴う調査でありますので、限られた部分発掘ではありますが、縄文時代中期末の貴重な資料を得ることが出来ました。

此の度、関係各位のご努力により調査報告書が作成され、地域の学術文化の面にいささかでも寄与できるなら幸いと存じます。

昭和63年3月

青森市教育委員会

教育長 安 部 健 五

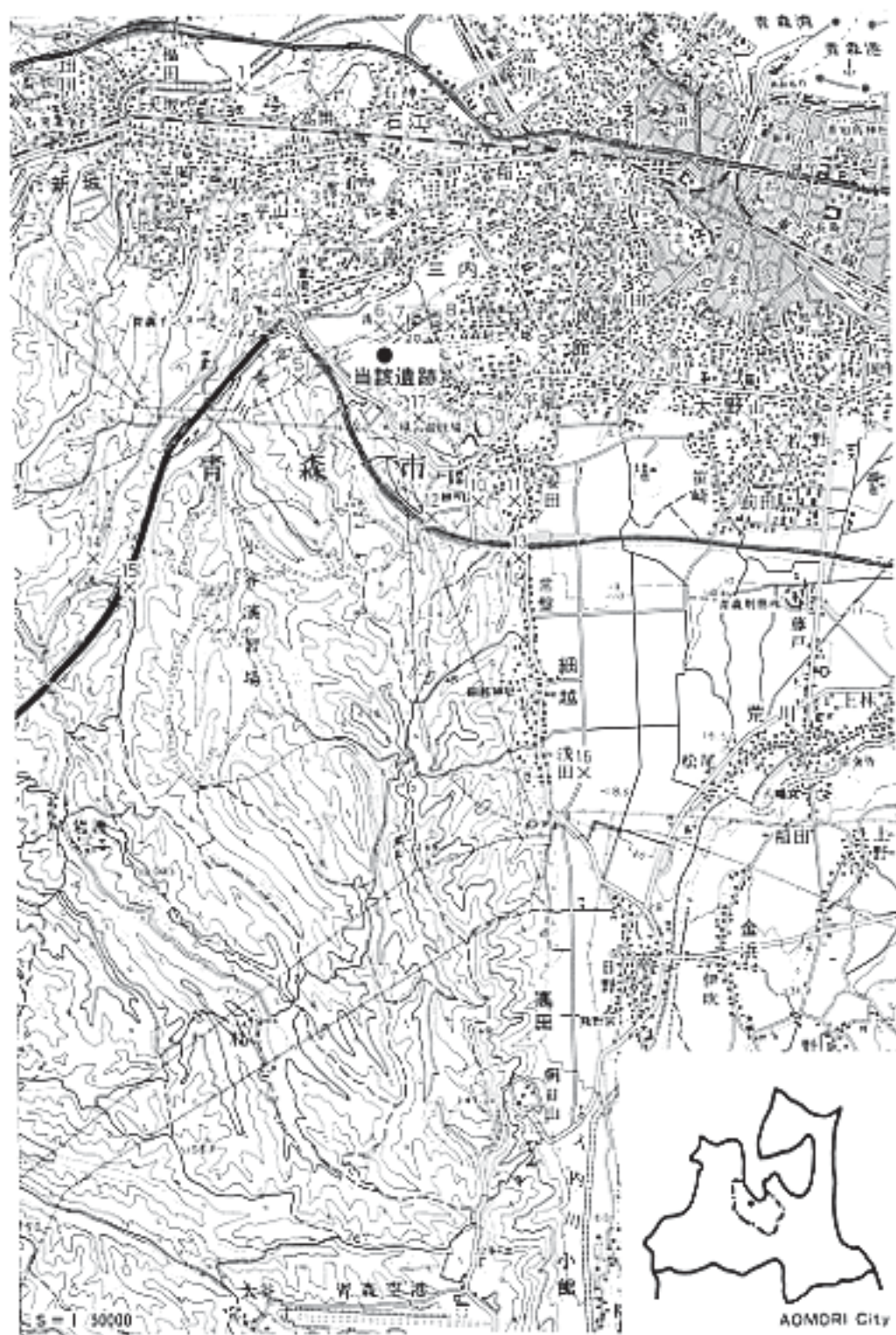
例 言

- 1.本報告書は、昭和62年度に発掘調査を実施した青森県青森市に所在する三内丸山 遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2.発掘調査は、青森市教育委員会が主体となって昭和62年6月8日から同年9月21日までの期間で実施した。
- 3.宅地開発に伴う緊急発掘調査であるので、費用は原因者である株式会社泉興産が負担したものである。
- 4.本報告書の執筆にあたっては、塩谷隆正、永井 治が行った。
- 5.写真撮影及び遺物整理は、永井が行った。
- 6.本報告書に収録した図版の縮尺は、それぞれの大きさによって数字及び単位を記載した。ただし、写真図版にかんしては、縮尺は不同である。
- 7.出土した遺物は、すべて青森市教育委員が保管し、地域社会の学術、文化の資料として活用するものである。

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
調査と概要	1
1．調査要項	1
2．遺跡の概要	1
発掘調査	6
1．調査方法	6
2．層 序	6
検出遺構	7
1．住居跡	7
2．溝状遺構	8
出土遺物	9
1．土 器	9
2．石 器	11
まとめ	18

第1図 遺跡の位置及び周辺の遺跡



調査と概要

1. 調査要項

1) 調査目的

宅地造成により遺跡が破壊される為、事前に発掘調査を行い、その記録を保存して地域社会の埋蔵文化財研究に寄与することを目的とする。

2) 遺跡の名称及び所在地

三内丸山 遺跡（遺跡番号 01020）

青森市大字三内字丸山 275 - 1

276 - 12、276 - 13

3) 調査面積

(1) 試掘調査箇所及び面積（2m × 2m）44ヶ所、176 m²

(2) 全面調査面積 500 m²

4) 調査期間

昭和 62 年 6 月 8 日から同年 9 月 21 日まで。

5) 調査主体者

青森市教育委員会

6) 調査参加者

塩谷隆正（青森市教育委員会社会教育課主幹兼文化係長）

永井 治（撚糸文会員）

田辺綾子（市民古代史の会々貞）

中村規夫（油川在住）

佐藤久子、佐藤フサ子、橋本ヒデ子、白戸良子（安田在住）

7) 調査依頼者 株式会社 泉興産

2. 遺跡の概要（第 1 図）

三内丸山 遺跡は、青森県青森県大字三内字丸山にあり、青森市の西部、JR 青森駅より南西へ約 4.3km、青森県総合運動公園に隣接する。その位置は、北緯 40° 48' 15"、東経 140° 42' 28" 付近である。青森港に北面して開けた青森平野の西側丘陵の麓に位置し、北に向かって舌状に突出し

た台地で、遺跡の標高は、約 10m から 18m にわたる。この舌状台地のすぐ北は、沖館川が南西から北東に流れているが、この川の対岸の台地上には三内霊園、大三内、稲元のそれぞれの地区があり、この台地も遺跡の豊富な所である。本遺跡の周辺には、貴重な遺跡が散在しているが、それは別表にしるした。

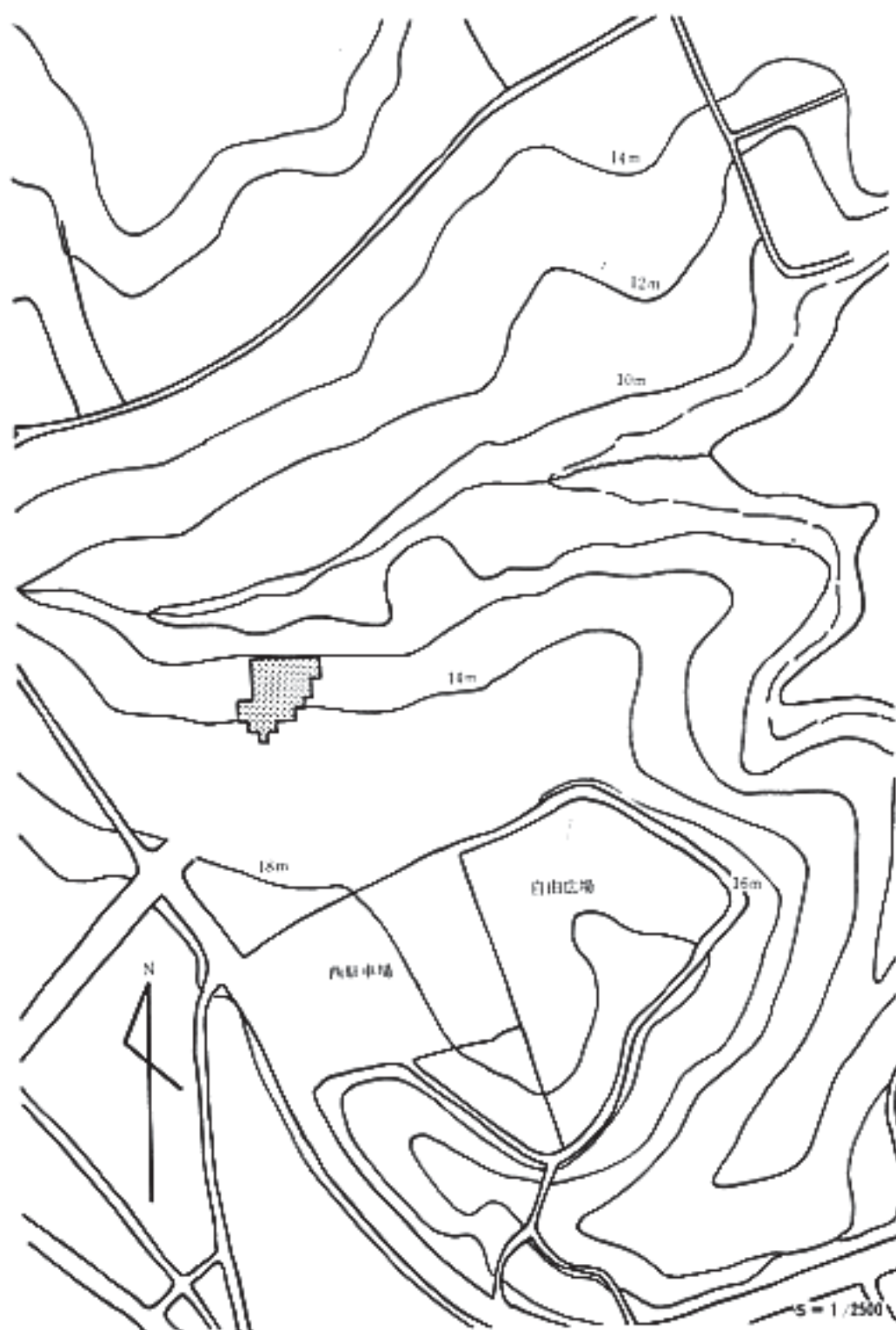
文献に表われた三内遺跡

南郡浪岡城主の北畠氏の日記役である佐藤兄之助の家記である「永録日記」(館野越本)の元和9年(1623年)正月2日の条に「また、青森近在之三内村二出候瀬戸物大小共皆人形二御座候是等モ訳知レ不申候」と亀ヶ岡遺跡と並び、三内から土器、石器、土偶の類が出土したと記されている。また、菅江真澄の遊覧記の寛政8年(1796年)4月13日から5月20日の大浜(油川)から黒石までの紀行を記した「栖家の山」の中に三内で土器が出土する文があり、図入りで縄文時代中期の円筒上層式の口縁部破片と土偶の頭部と胴部片をのせている。また大正9年7月(1920年)青森県教育会で編集、発行した「青森県地誌全」の中に「石器時代遺物遺跡発見の表の中に、東郡滝内村大字三内字里見出土の石族、石斧が東京帝国大学人類学教室で所有していることが記載されている。さらに、昭和3年10月(1928年)に東京帝国大学理学部人類学教室で編集した「日本石器時代遺物発見地名表第5版」に、滝内村、三内円山から石族、石包丁、石匙の出土を八木装三郎が報じている。

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地目	時代	備考
1	西高校	新城字平岡	校有地	弥生	
2	三内霊園	三内字沢田	墓地	縄文(前・中)	昭和36～37、市教委調査、報告
3	石江	石江字江渡	宅地	縄文(前)	
4	沢部	三内字沢部	畑地	縄文(早～後)	昭和52、県教委調査、報告
5	三内	三内字丸山	山林	縄文(早～後) 歴史	昭和51、県教委調査、報告
6	三内丸山(2)	三内字丸山	山林、畑 運動公園	歴史 縄文(中～後)	昭和42、市教委調査、報告
7	小三内	三内字丸山	畑地	縄文(前～後) 歴史	昭和28～33、慶応大学調査、報告
8	浪館(1)	安田字近野	宅地	縄文(前)	
9	浪館(2)	安田字近野	畑地 草地	縄文(中・晩)	
10	安田水天宮	安田字稻森	畑地	縄文(後)	
11	安田(1)	安田字近野	山林	縄文(前)	
12	安田(2)	安印字近野	畑地		
13	細越館	細越	校有地 畑地	歴史	昭和57、市教委調査
14	新城平岡	新城字平岡	山林原野	縄文(前・中)	
15	熊沢	岩渡字熊沢	牧草地	縄文(早～後)	昭和52、県教委調査、報告
16	細越	細越字千種	水田	縄文(晩)	
17	近野	安田字近野	運動公園	縄文(前～晩) 歴史	昭和48、49、51、県教委調査、報告

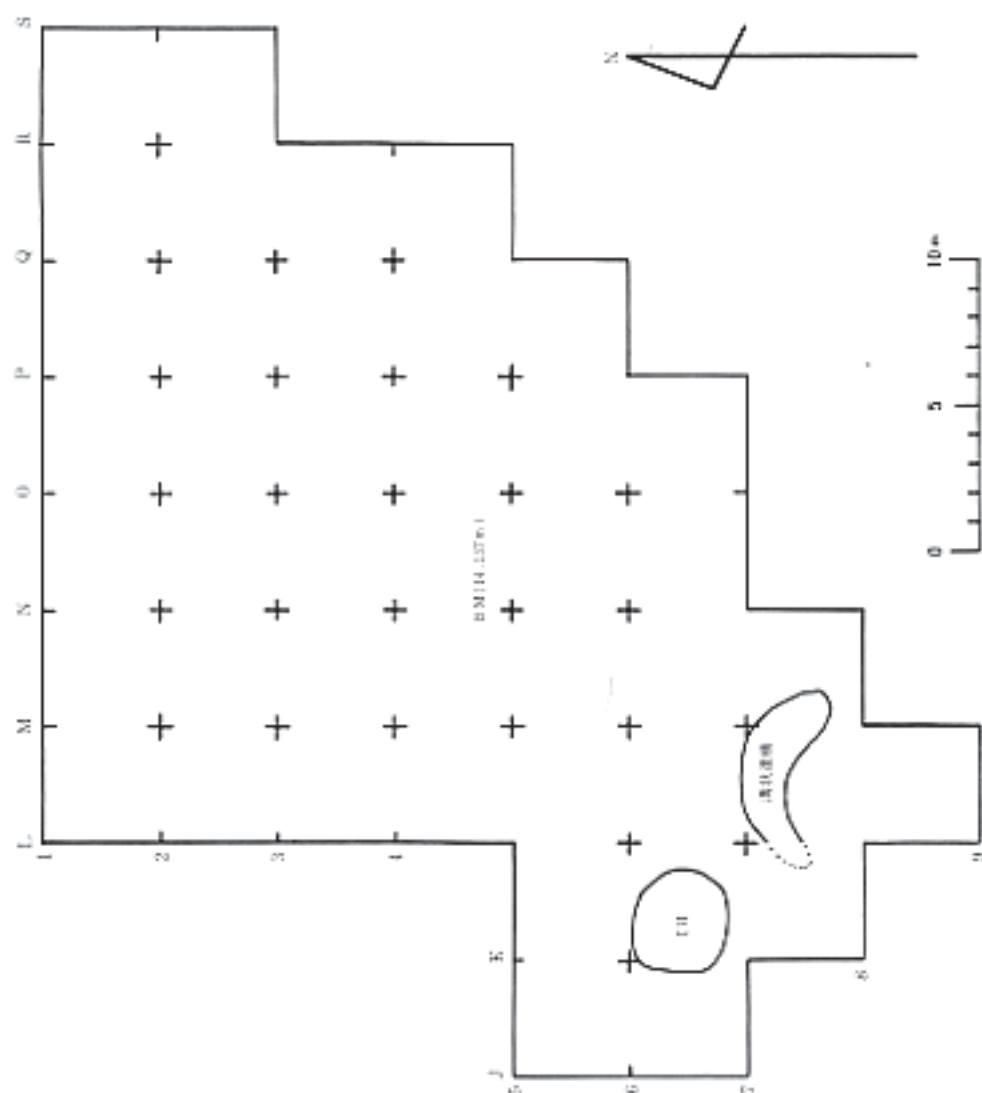
第2図 地形図及び発掘区



第3図 試験グリッド配置図



第4図 グリッド及び遺構配置図



発掘調査

1. 調査方法（第2、3、4図）

発掘調査は、まず対象となる地域の試掘調査から（2m×2mのグリッド第3図）を行い、台地の北面沢に向ってゆるく傾斜する地区が主体部と判断して、1区画4m×4mのグリッドを設置した。各グリッドの名称は、南北を算用数字、東西をアルファベットで表わし北東方向にA-1、2、3……、B-1、2、3……と称することとした。また南北ラインを磁北に一致させた。実測図作成に当っては平板実測、遣方実測を併用し縮尺は原則として20分の1とした。遺物の取り上げは各グリッドを基準として座標を実測し、層位、レベリング、出土状態等を遺物台帳に明記して写真撮影後に1点ごとに取り上げることにした。

N-5にベンチマークを設置し14、137Mとした。

2. 層序（第5図）

南北をNラインの東側、東西を5ラインの南側を基本層序として色調、成分、性質、包含遺物などを記録することにした。

第層 暗茶褐色土層

一面の笹敷で黄色粒子（1mmから5mm）を若干混入する。

第層 暗茶褐色土層

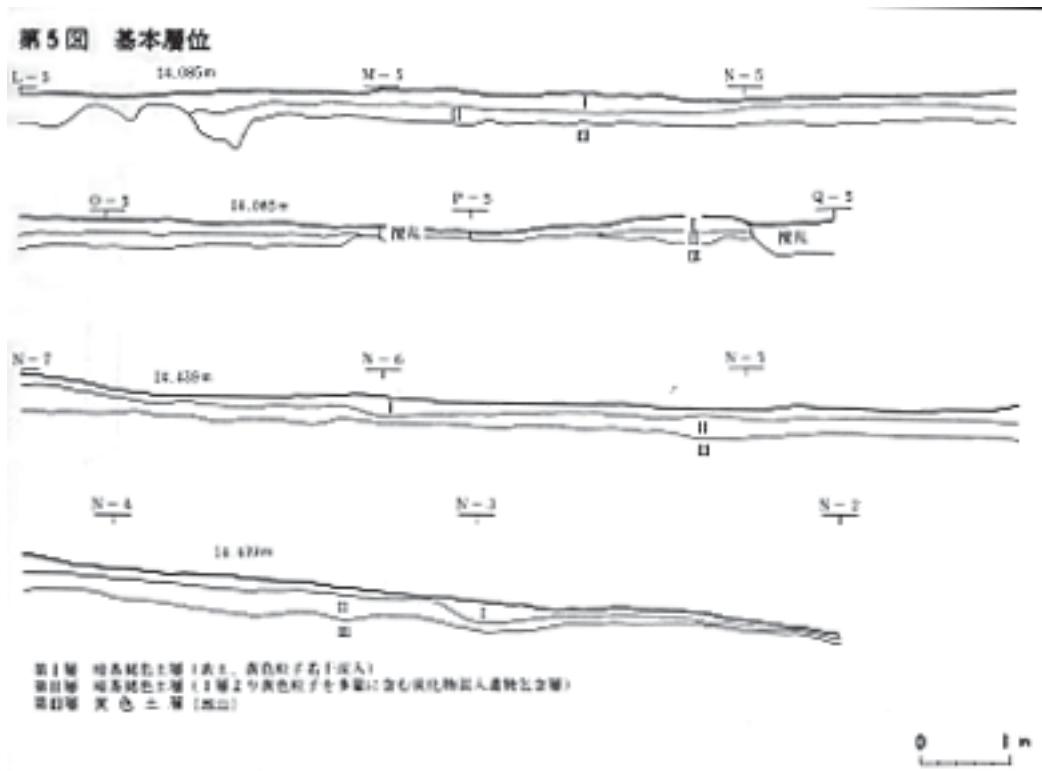
第層よりも黄色粒子を多量に含む為、若干明るく見える。本遺跡から出土する遺物はこの層である。また検出された遺構は本層下面から第層に達している。炭化物混入。

第層 黄色土局

地山、所謂ローム層である。

表2 調査進行表

		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
62 年 度	事前準備			%%									
	発掘調査			%	—————				%				
	室内整理							%	—————				%



検出遺構

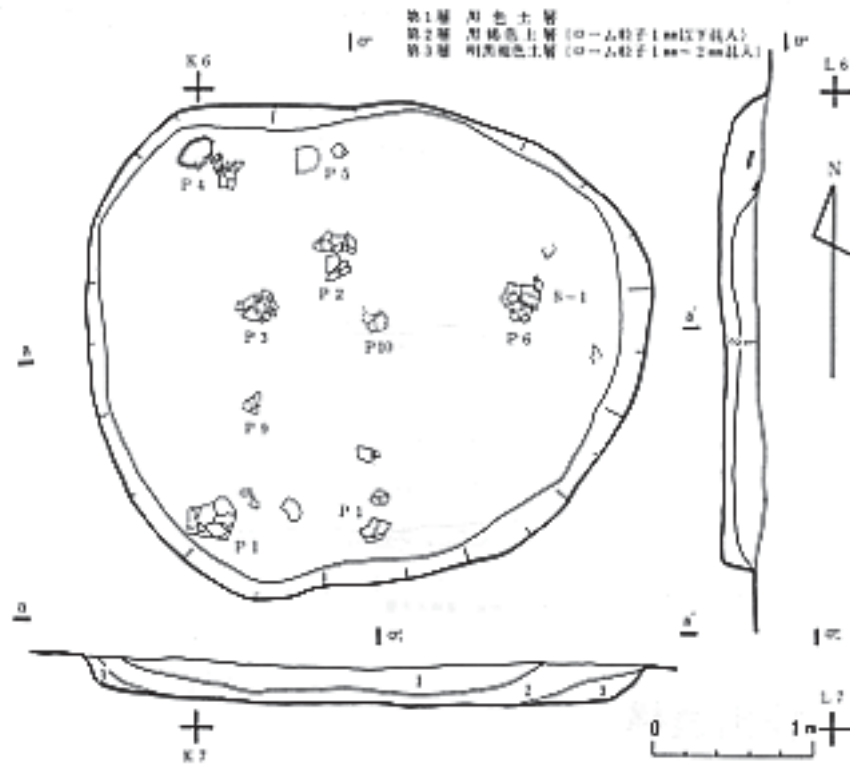
1. 住居跡（第6図）

J - 6、K - 6区からの検出で第 層下面で円形に黒色土での落ち込として確認した。ほぼ円形に近いものの不整形である。長径3.5M、短径3M、壁高20cmで覆土は全部で3層に分かれる。第1層 黒色土層、第2層 黒褐色土層（黄色粒子1mm以下混入）、第3層 明黒褐色土層粒子（黄色粒子1mm～2mm混入）。柱穴、炉等の付属施設を確認することはできなかった。

出土遺物（第10、11、12図）

出土した土器は全て破片で第10図3は推定口径が約42cmになる大型のカメ形土器で、口縁はゆるい波状口縁を呈し頂点を浅くえぐっている。口縁部と胴部の境に竹管状工具で刺突点列を巡らし直下に平行して沈線文が施文されている。しかしこの沈線は波状口縁頂点下で逆「U」字状に垂下する。第10図4は大型のカメあるいは壺の底部でRLの原体を斜めに回転させた縦走を呈す。第12図1～3はRLの原体を斜位縦走させた縄文地に、平行に3本の沈線を垂下させた大形のカメあるいは壺型土器の胴部である。第12図4、5はこれも大形のカメあるいは壺型土器の頸部で、口縁部と胴部の境いを無文帯と施文帯で区別しており、縦位のRL縄文地に二列の竹管刺突列点を施し、さらに逆「U」字状に沈線を垂下させる。石器は（第11図4）石鏃が一点出土した。長さ2.7cm、幅1.6cm、厚さ4mmのおそらく無茎のものと思われ、剥離調整は全面に及んでいる。

第6図 住居跡



2. 溝状遺構 (第7図)

K - 7、L - 7、M - 7区にかけて検出された三日月形を呈する遺構で基本層第 層を掘り込んでおり、覆土は全部で5層に分けられる。第1層 黒褐色土層(黄色粒子混入)、第2層 白黄色土層(火山灰)、第3層 明茶褐色土層(黄色粒子、炭化物混入)、第5層 晴茶褐色土層(黄色粒子、炭化物混入)、この遺構からは遺物は検出されなかった。計測値は長さ5.5Mである。

小括

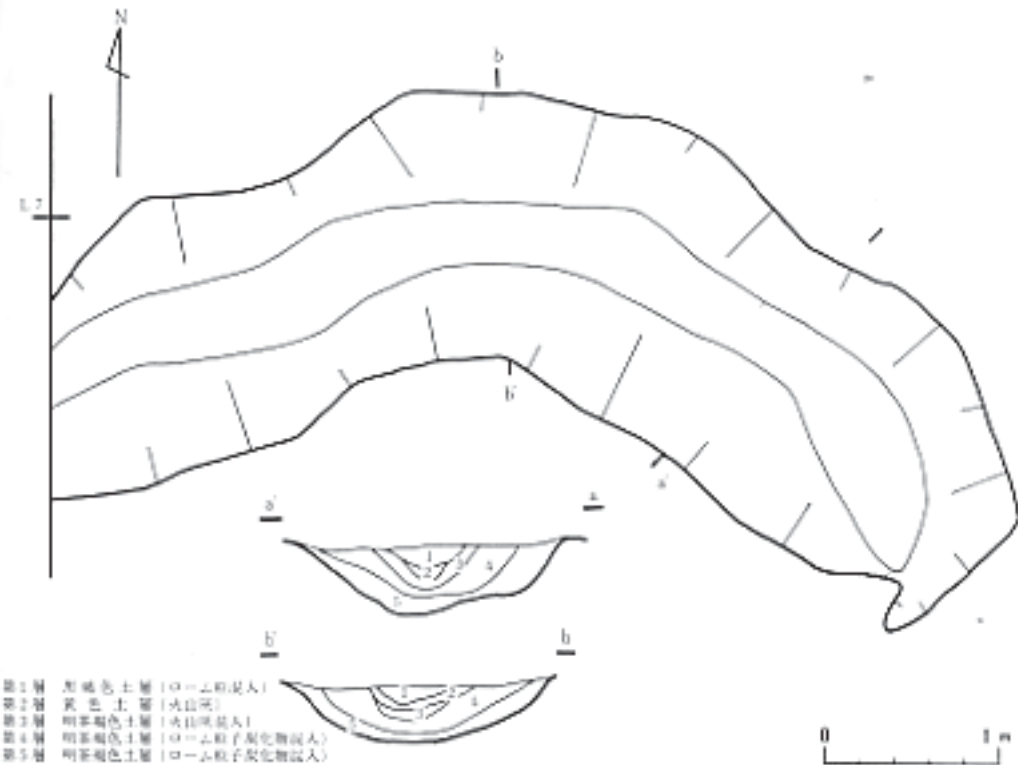
住居跡

基本層二層下面から第 層を掘り込んで、構築されているが炉等を持たない住居跡である。出土した土器は所謂中ノ平 式といわれる土器で、床面直上(覆土からも)からの出土であるから、本主居跡は縄文時代中期末に所属するものと考えられる。

溝状遺溝

基本層第 層を掘り込んで構築されている、そのため年代的には縄文時代中期以前と思われるが定かではないし、その性格、全貌についてはまったく不明である。

第7図 溝状遺構



- 第1層 灰褐色土層 (ローム崩壊土)
- 第2層 黄土層 (火山灰)
- 第3層 明茶褐色土層 (火山灰混入)
- 第4層 明茶褐色土層 (ローム粒子混入)
- 第5層 明茶褐色土層 (ローム粒子混入)

出土遺物

1. 土 器

本遺物出土の土器は、縄文時代中期と縄文時代後期の土器である。

縄文時代中期の土器 (8、9、10、12、13 図)。

基本層第 層からの出土で本遺跡出土の土器は、ほとんどがこの時期である。

第8図1は、口唇部に波状の隆帯文を巡らし隆帯上に撚糸圧痕文を施し隆帯間の空間には竹管による刺突文が施文される。器形としてはかなり大形の深鉢型になると思われる。

2は、1の隆帯上の撚糸圧痕文のかわりにヘラ状の工具によるきざみになっており、これも深鉢型と思われる。

3は、口縁部の突起で撚糸圧痕文と隆帯 (隆帯上は無文) で飾られた、深鉢型土器と思われる。

4～6は、深鉢型土器の口縁部の小突起の部分に粘土紐を貼り付け、単節RL(6はLR)の斜行縄文地に沈線で弧線文を施しており、口唇部は撚糸圧痕文で飾られている。

7は、口唇部にほそい粘土紐を波状に巡らせた深鉢型と思われるもので、単節RLの斜行縄文地に沈線で弧線文を施文するものである。

8～17は、深鉢型土器の胴部片で単節RLの斜行縄文地に、隆帯を垂下させそれに平行させて沈線で連続波形文を施文しているもの(8～12、14、15)や、沈線による弧線文(13)のものあるいは沈線による胸骨文(15、17)である。

18～25は、深鉢型土器の口縁部と胴部である。突起下に蛇行した沈線文を垂下させ、これによって紋様帯を区画し、その間を2条の平行沈線文と弧線文で飾られるものである。

26は、深鉢型土器の口縁部で口唇部に深い沈線を巡らす。RL単節斜縄文地に二条の沈線を巡らすものである。

第9図1、2は、大形のカメ型土器と思われるものの口縁部で、波状口縁頂点直下に(頂点部を浅くえぐる)円形にくぼませそのくぼみを囲むように沈線を施文している。

3、4は、口縁から胴部にかけての破片である。半截竹管により2列(3も同じと思われる)の刺突列点を施し、それぞれの縄文地(3は単節LR斜位横走、4は単節LR横位斜行)に斜め下方に向かって「ゼンマイ」状の沈線を垂下させる。

5～11、これも深鉢型と思われる土器の口縁から胴部にかけての破片である。いずれも半截竹管により刺突列点を施しているが、沈線が大きく逆「U」字をなしそれぞれの逆「U」字間に沈線をもう1条垂下させるもの(5、6)や、逆「U」字が小さくそのなかにもう1条沈線を垂下させるもの(7、8)あるいは、単に3条の沈線を垂下させるもの(9～11)がある。地文は5～8が単節RL横位斜行、9、11は単節LR横位斜行、10は単節LRを上部では横位、中央から下部にかけては縦位である。

12は、円形竹管による2列の刺突列点と逆「U」字形の沈線で飾られている鉢型土器と思われる。

13～19は、単節RL横位斜行の地文に逆「U」字形の沈線文に円形竹管による刺突を組み合わせて施文されているものである。出土状態、土器の胎土等から同一個体と思われる。

20～27は、所謂折り返し口縁で器形は全てが深鉢型と思われる。全てが縄文のみで20～23は折り返し部にまで縄文を施文しており、その内20、22は単節RLのそれぞれ同じ原体を口縁部と胴部に同方向に施文しているが、21は単節LRを口縁部は横位、胴部は縦位に施文し23は単節LRを口縁部は縦位、胴部は横位に施文している。

第10図1は、折り返し波状口縁を持つ深鉢で口縁部をのぞく器面全体に、単節RLの縄文を横位に施している。またすり消を加えている。

2は、底部からのふくらみを頸部で内反させているもので内反させた頸から付近に2条の平行沈線を巡らし、それを墳いに上部が無文帯になる。胴部の文様は、2条の平行沈線の下に波形の沈線を施し、その下に逆「U」字あるいは円形の沈線文を施す。また波形の空間を埋めるように円形竹管文を施文する。地文は、単節RL斜縄文である。

5、6は、縄文地のみ深鉢型大器である。二つとも単節RLを斜位縦走り器面全体に施してある。

以上の縄文時代中期の土器の所属形式は、次の通りである。

第8図1としては、隆帯間の空間に施文された文様が、縄文原体圧痕から半截竹管文に変わっていることから円筒上層C式に所属するものである。

3から25にかけては、隆帯がなくなりその変りに沈線による弧線文、胸骨文等で飾られ口縁突起も小さくなる円筒上層e式に所属するものである。

26は、口唇郡の深い沈線から榎林式に属するものと思われる。

第9図1～27と第10図1、2は、竹管の刺突列点、垂下する逆「U」字状（懸垂文）の沈線や、折り返し口縁等の特徴から中ノ平式に所属するものである。

第10図5、6は、所属する形式を明確にすることはむずかしく、おそらく縄文中期最終末、後期初頭に近いものと思われる。

縄文時代後期の土器（第13図）

第13図1～8は、大形の深鉢型土器を呈すると思われる、櫛目状の沈線文を施行する十腰内式に属するものである。

2. 石器（第11、14図）

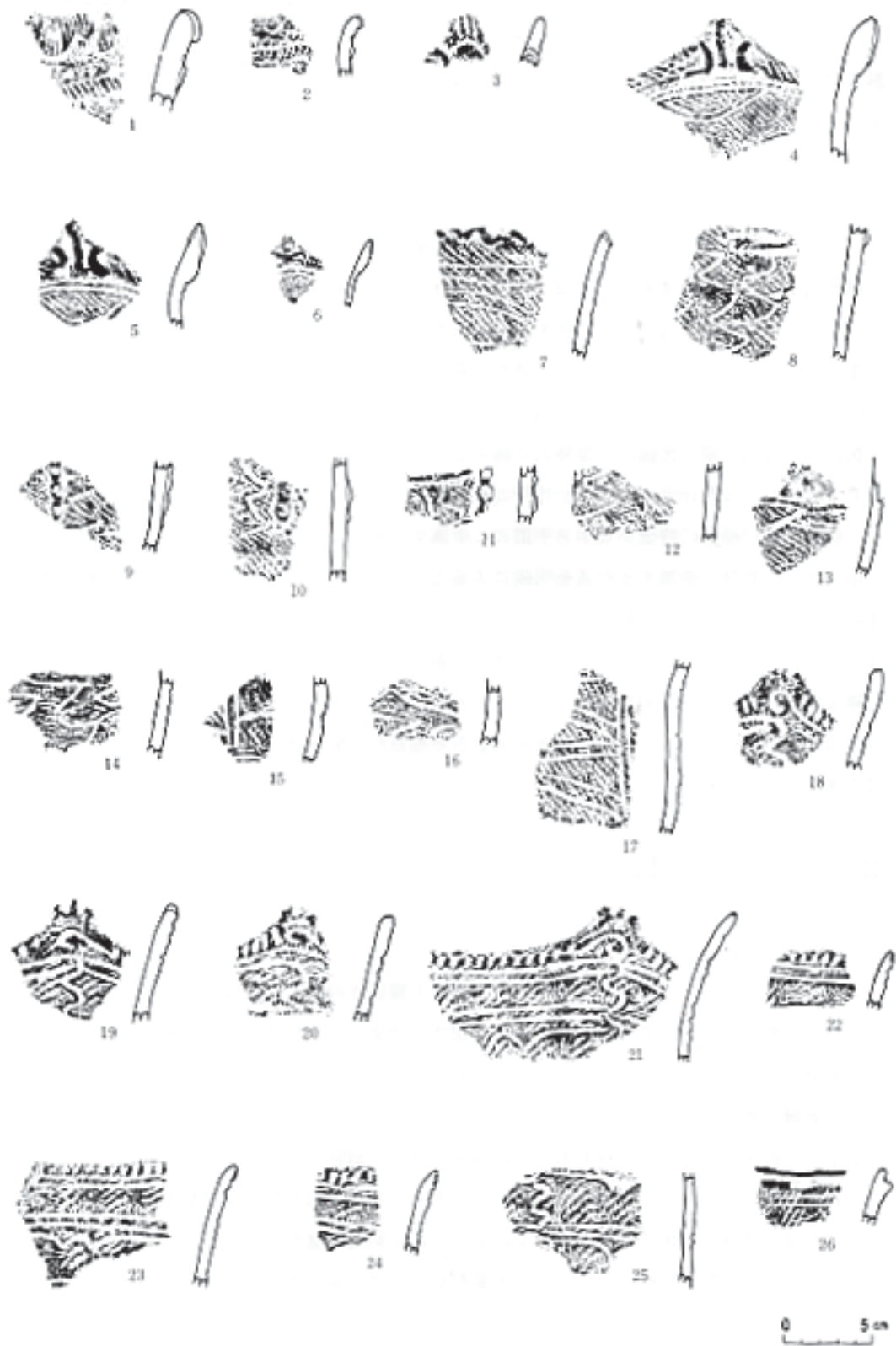
1) 石匙（第11図1）

出土した石匙は、1点のみで平坦な打撃面を残す翼状形の剥片を素材としており、その先端部につまみを作出しているもので、刃部は片面加工によって一側縁に作出されている。つまみは、両面加工を施し概して雑な作出となっている。

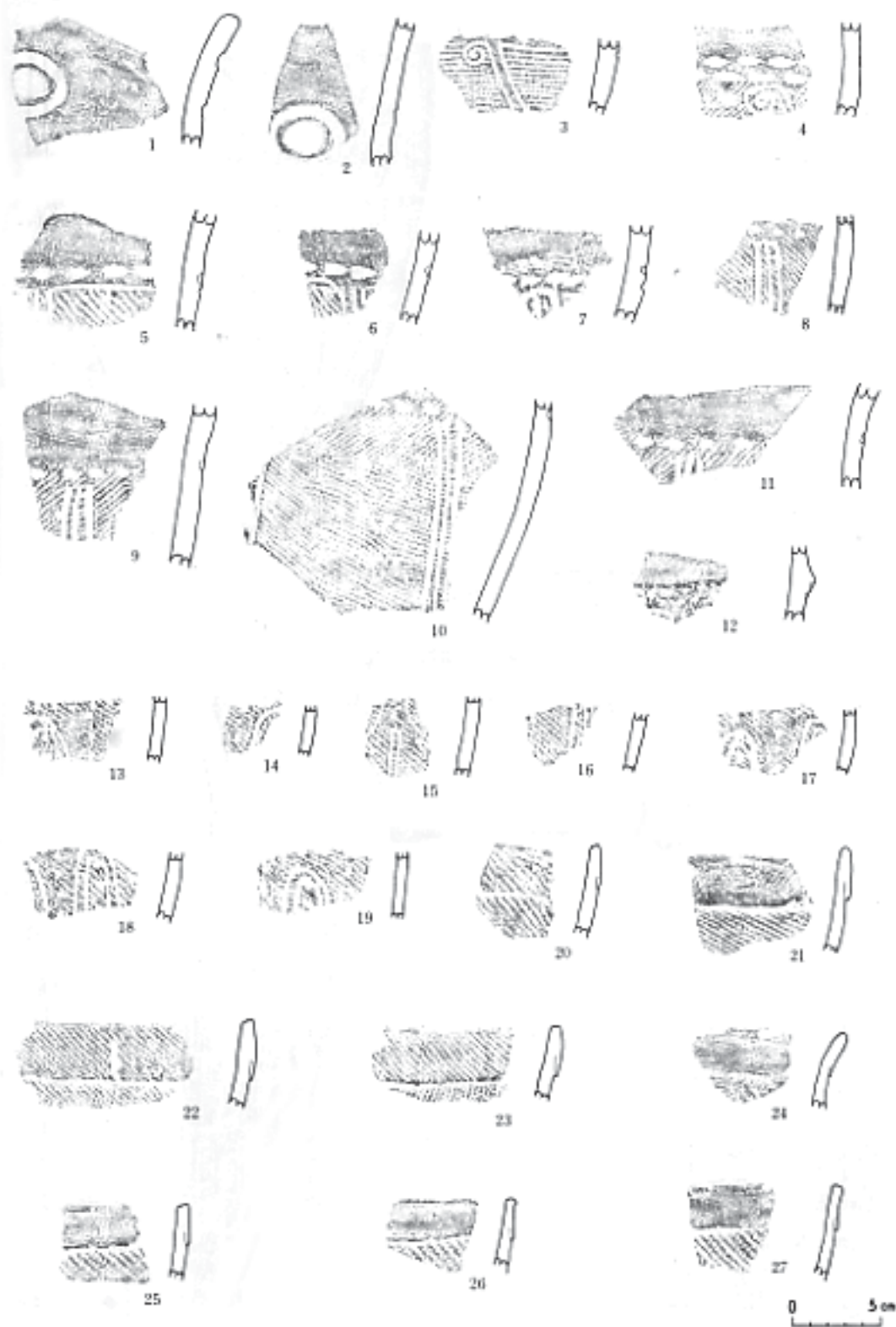
2) 石鏃（第11図2～5）

出土した石鏃は、全部で4点ある。2は有茎石鏃で、逆刺しの形状が「Y」字状に成っており、剥離調整は全面に及ぶものの粗雑な作りである。3は、入念な剥離調整を施した無茎石鏃で底辺を浅く「η」字状にえぐり込んでいる。4は、剥離調整をこまかく施した無茎石鏃である。5は、剥離調整を側縁にのみ施した無茎石鏃で、菱形を呈す。

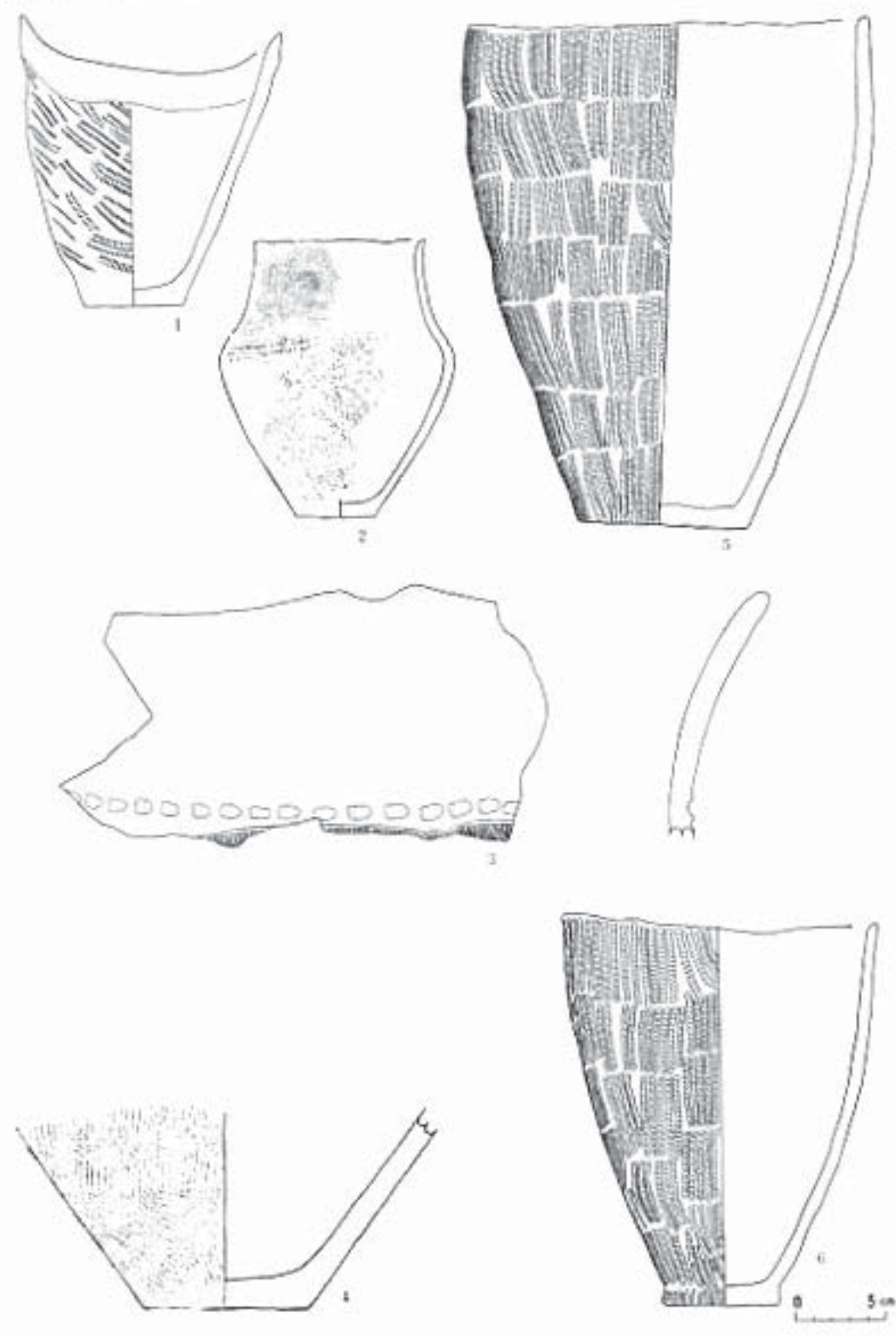
第8図 縄文時代中期の土器拓影図



第9図 縄文時代中期の土器拓影図



第10図 縄文時代中期の土器拓影図



3) 石斧 (第11図6)

刃部を欠き基部のみのものが、1点出土しただけである。

4) くぼみ石 (第14図1~8)

全て川原石を使用しており盲孔が片面のものと両面のものがある。1~6は、盲孔が両面に穿たれたもので5を除いて概むね円錐形を呈し、だいたいが向き合っている。また6は、側面に擦痕が残されている。7、8は、片面にのみ盲孔が穿たれたものである。

5) 敲打石 (第14図9)

楕円形の川原石で半分にカットされたような形を呈し、自然面をかなりの力で敲かれたものと思われる。

6) 砥石 (第14図10、11)

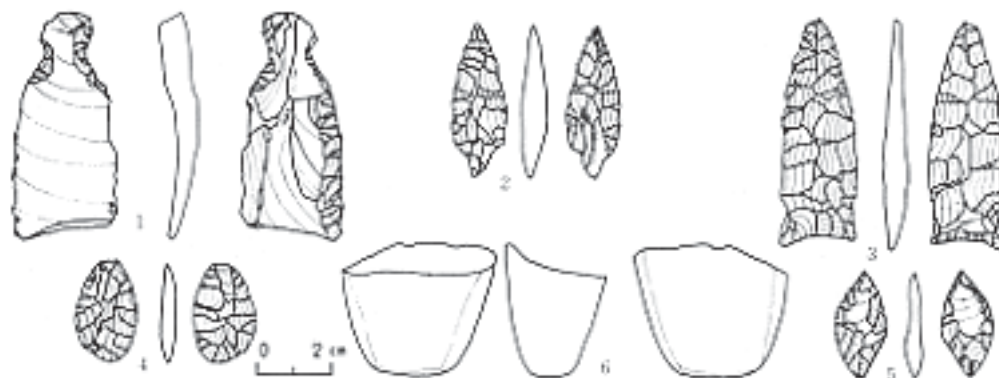
10は、川原石を利用しており約5mmほどの溝が数条穿たれている。11は、断面が「U」字状を呈す2本の溝が交差するものであるが、器面全週にわたって研ぎがかかっている。石材は砂岩である。

7) 石棒状石製品 (第14図12)

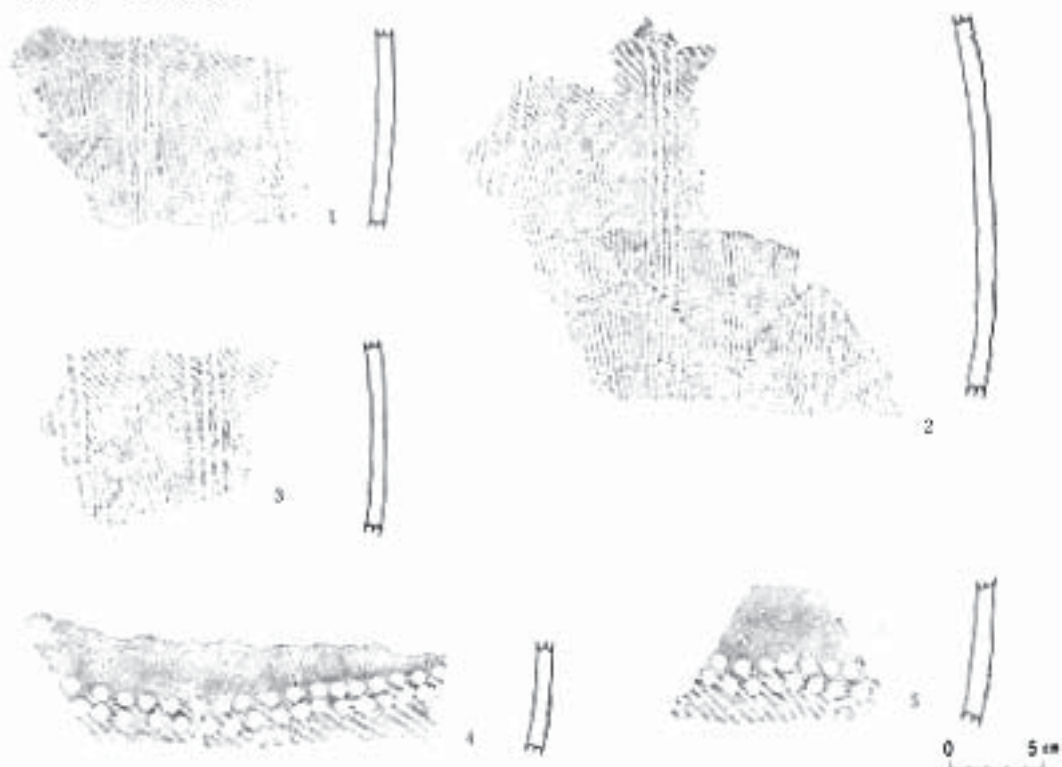
全体の形状は不明であるが、円柱状の川原石の全体を研磨、整形して作られた無頭のものである。

以上本遺跡から出土した石器であるが、時期を明確に設定することはむずかしいが、出土した土器と層位的なずれがほとんどないことから、縄文時代中期末から後期初頭におよぶものと考えられる。

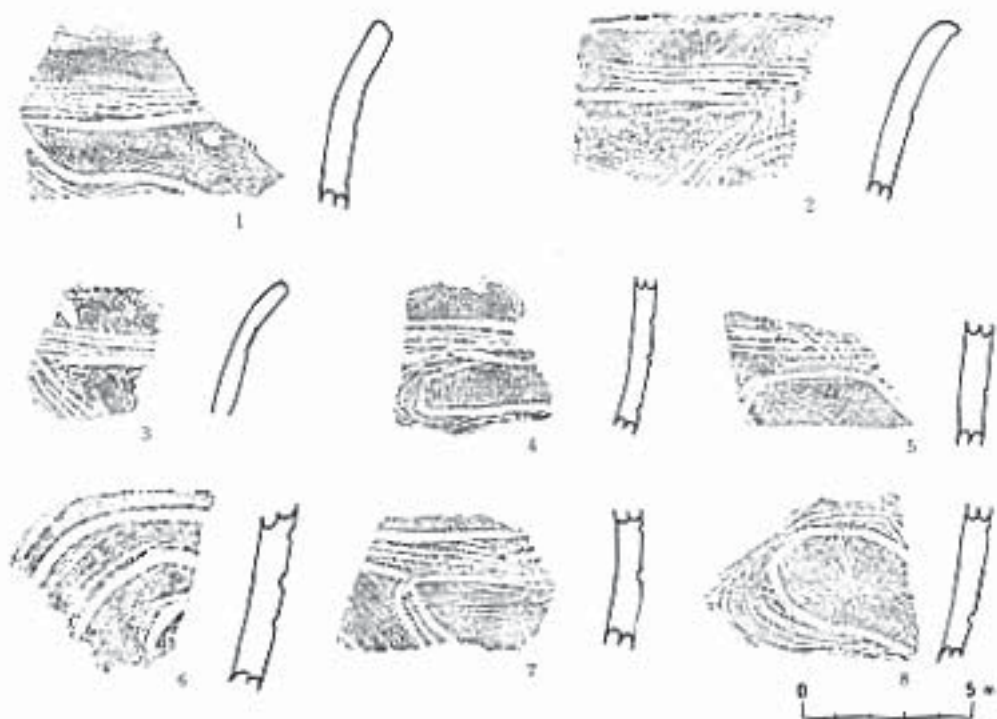
第11図 石器



第12図 土器拓影図



第13図 縄文時代後期の土器の拓影図



第14圖 石 器



まとめ

青森市の三内地区は、古くから文献に記録されており、付近一帯は貴重な遺跡が散在している。その1つが三内丸山 遺跡である。今回の調査は、該当する遺跡の全容を明らかにすることはできなかったが、人為的な攪乱が少なく、縄文時代中期から後期にかけての遺物、遺構が検出された。検出された住居跡は、1軒しかなくこれだけでは集落としての機能が、調査区内にあったかどうかは疑問がある。しかし層位学的（基本層第 層下面から掘り込んでいる、この層は、本調査の主要遺物である縄文中期末から後期初頭の土器を含む）に見てもまた、遺構内出土遺物を見ても縄文時代中期末から後期初頭にかけて構築されたと考えられる。溝状遺構については、使用目的等なんら裏づけされる遺物等が検出されず、まったく性格が不明であるが、層位学位に見る年代は、住居跡よりも古いと考えられる。

出土した遺物は、円筒上層e式、中ノ平 式が主流で、円筒土器文化が、大木系文化の影響を受けあるいは影響しあいながら、大きな変化をとげそして消えていく、ちょうどそうした時期に相当すると考えられる。

調査は、行政発掘という性格上限定された範囲に留まり三内丸山 遺跡の一端を明らかにしたにすぎないが、本遺跡が縄文時代中期末に属することや、縄文時代中期の研究に寄与するであろうことは、今調査の成果である。

最後に、調査、整理作業は、試行錯誤の繰り返しで資料を吟味検討する時間的余裕もなく、十分な成果を本報告書に盛り込むことはできなかった。また、我々の力量不足のため、本報告書を一読したならば不十分な点が多々目に付かれたものと思われる。残された多くの問題については、さらに努力をかさねその責任を果したいと考えており、研究者各位の忌憚のない御叱正を希望するものである。

（執筆・編集：塩谷隆正、永井 治）

参考文献

中ノ平遺跡発掘調査報告書：青森県教育委員会 昭和49年

中ノ平遺跡発掘調査報告書：日本鉄道建設公団青函建設局、青森県教育委員会昭和47年

東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察、北奥古代史文化第8号 鈴木克彦

石神遺跡：江坂輝弥 ニューサイエンス社

近野遺跡発掘調査報告書（ ）青森県教育委員会 昭和49年

近野遺跡：三内丸山（ ）遺跡発掘調査報告書 青森県教育委員会 昭和51年

青森市三内遺跡：青森県教育委員会 昭和52年

三内沢部遺跡発掘調査報告書：青森県教育委員会 昭和52年

最花見塚調査報告書：むつ市教育委員会 昭和61年

縄文土器大成：講談社刊

写真図版

写真1



遠景(北方より)



遺物出土状態(縄文時中期)



近景(同上)



同上



基本層位



同上



作業風景



同上

写真2



住居跡(確認面)



石器出土状態



同上(遺物出土状態)



石器出土状態



同上(覆土)



同上

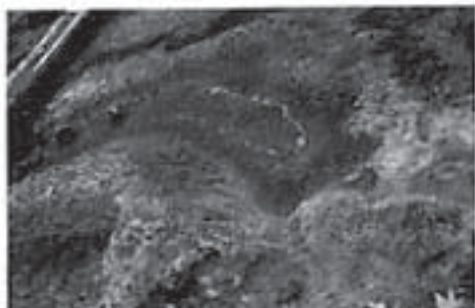


石器出土状態



石器出土状態

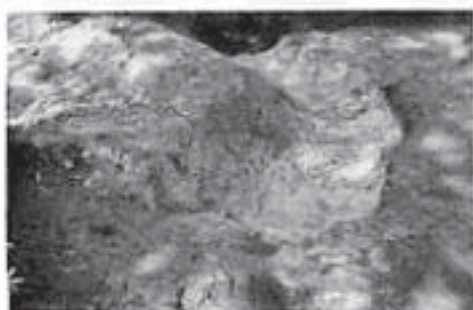
写真3



溝状遺構確認図



覆土



完掘状態

写真4

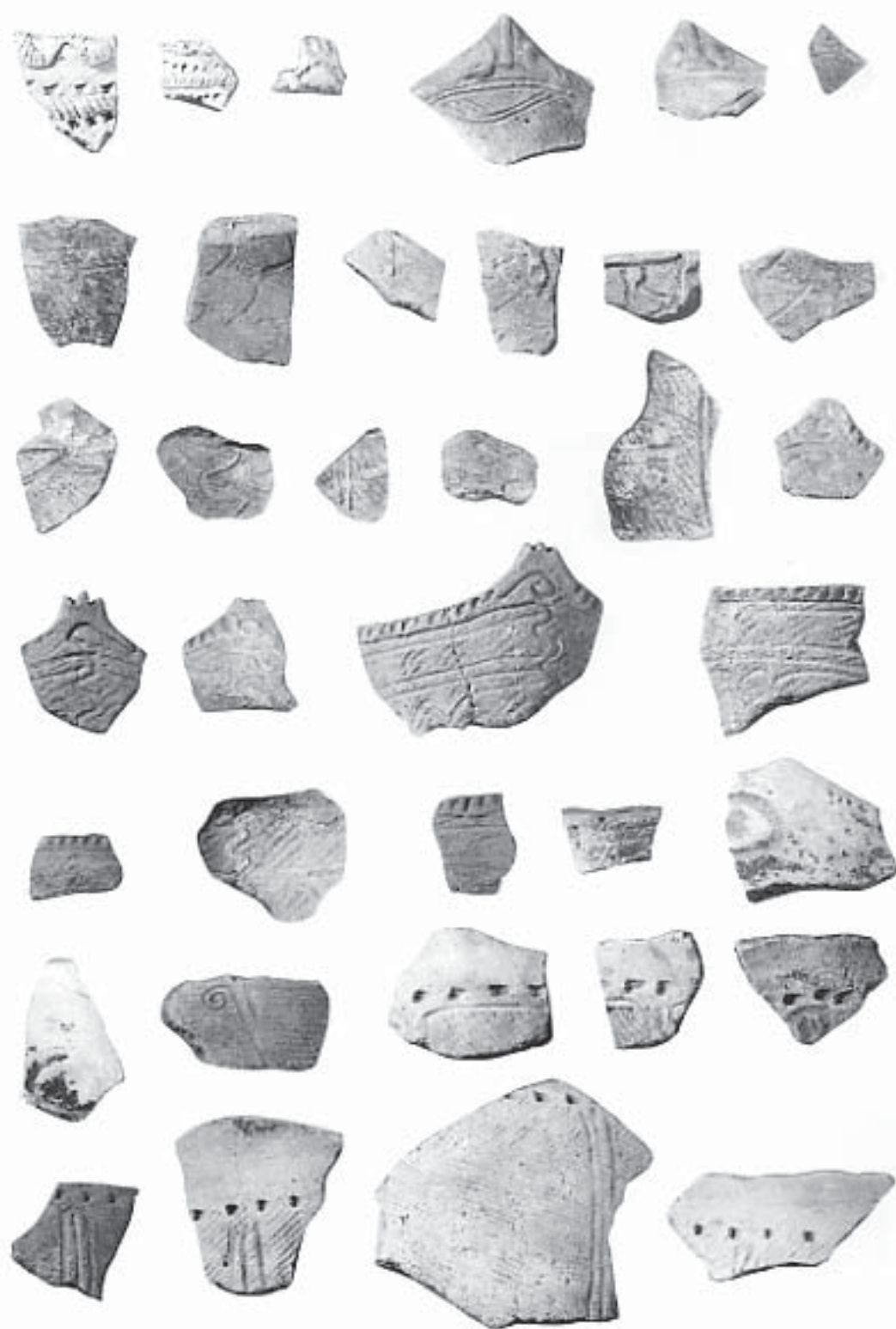
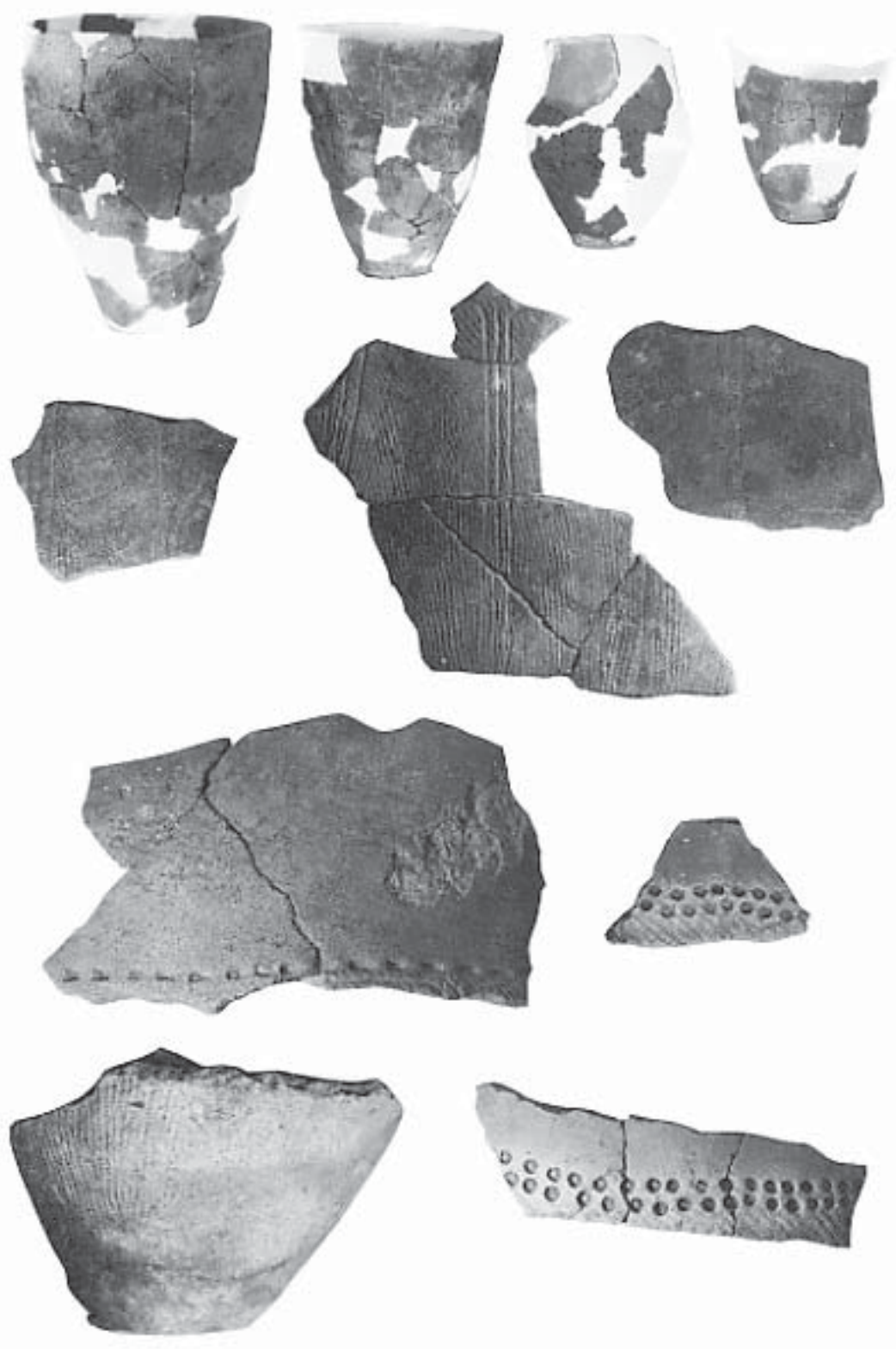


写真 5



写真 6



三内丸山 遺跡発掘調査報告書

発行日 : 昭和63年3月31日

発行者 : 青森市教育委員会

印刷所 : 青森オフセット印刷株式会社